

論語で評価改善力を

われひ わ み さんせい
「吾日に吾が身を三省す。」
【学而】

【吾日三省吾身】。
この意味はいうまでもなく、

「私は、一日に何度も自分自身を省みる」ということです。もともとのこの章句の現代語訳は次のようになります。

『孔子の弟子曾子(そうし)が言いました。私は一日に何度も自分自身を省みる。人のために相談相手になって十分にまごころをつくさなかったのではないか。友達とつきあっているをつくようなことをしたのではないか。自分が十分理解していないことを人に教えたのではないか、と。』
このように、我が身を省みることは、改善すれば成長につながるからではないでしょうか。学んで新しいことを知り、その意味を考え、それを実生活に活かし、省みる。このように繰り返す中で、もし過ちがあったならば

「過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ。」
【過而不改、是謂過矣】
【衛霊公】

「過ちに気づいても改めなかったら過ち」

なので、すぐに改めたらいいですね、と孔子も説いてます。また、

「過てば則ち改むるに憚ること勿れ。」
【過則勿憚改】
【学而】

「過ちに気づいたら改める。それでいいですよ」とも説いています。

まさに、今の言葉で言えば、これらは評価改善力を磨くことを説いていると考えます。しかも結果の評価改善力だけではなく、自分を俯瞰的・客観的に観て評価改善するメタ認知力ともいえると考えます。

因みに、米国心理学者ギルフォードは、問題解決能力を、認知力・記憶力・集中思考力・拡散思考力・評価力の五つに大きく分け、偏ることなくバランスとれた育成を裏証し成果を発表しました。それは今でも活用されています。認知力とは理解力であり、理解した知識を記憶する記憶力、この二つは従来の所謂暗記型学力の中心をなすものでした。しかし、真の学力、問題解決能力には、それらだけでなく、集中思考力(論理的思考力)、拡散思考力(発想力)の二つの思考力に加え評価力を挙げました。これら五つの能力をバランスよく伸ばすことを提唱したのです。

思考力と云えば、普通集中思考力の論理的思考力を思い浮かべます。それは、三段論法などの演繹法だけでなく、論語にみられるように各時代時代で大切だと思ふことを学びその中から傾向性、法則性を見いだし一般化するなどの帰納法、或いは背理法などがあります。

また、そのような集中思考力だけでなく、拡散思考力も問題解決能力には欠かせない思考力だと思います。レングアを見て、花壇などに使うというだけでなくブックエンドに使うと発想を転換することや、蓄積された潜在意識が働き筋道に関係なく方法をハツと発想したりする能力も重要な問題解決力だと考えます。

更に、必須の能力に、評価力があります。これは、大きく二つにわかれます。一つは、結果の評価力です。結果を他の結果との関連で評価したり、結果から課題を抽出し次の取り組みに活かすこと、又解決の結果だけでなく解決したプロセスをもう少し簡潔にできなかつたかなど評価する能力です。もう一つは、途中評価力で結果に至る前に、自分や事態を俯瞰的客観的に観て修正或いはそのまま進めるなどとする評価力です。メタ認知ともいいます。

これらは、現在、高次の学力形成において必要とされる能力・資質だと考えます。つまり、学習に向かう力・人間性ともいえると考えます。徳を磨きより人類や宇宙大自然にとつて善き発展になるようこれらを駆使し、知識・技術も身に付ければ情報を有効に活用する能力に活きて働くのではないかと考えます。デジタル化もそれが目的ではなく、より平和で豊かで幸せな生活のためのもことになるのではないのでしょうか。だから、論語では

「学びて思はざれば則ち罔し。思ふて学ばざれば則ち殆し。」
【為政】

【学而不思則罔。思而不学則殆。】
と基礎基本を学ぶことと、考えること評価することを説いています。もちろん自分勝手になっていないかどうかの評価はいうまでもありません。

こういう道の探求活動の楽しみを味わい続けていたのが孔門第一の弟子顔回ではないかと考えます。

「賢なるかな 回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂に堪へず。回や其の樂しみを改めず。」
【雍也】

【賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂。回不改其樂。】

顔回は、人が堪えられないと思えるような、一汁一菜の粗末な食で狭い小路に住まいながら、でも学びの楽しさを味わってやめようとしないのです。

このように思考力評価力等高次の学力は、人間性や学習に向かう力等の徳と一体のものだと思えてなりません。